静中・静高関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報　第40号
平成7年12月12日発行
編集人　上杉重吉

野球部創部百年に寄せて

67期　法月郁雄

大正七年の県大会から平成六年の間の公式戦試合数九七九試合（七六三勝二一六敗）、このうち甲子園春夏出場回数三十二回。全国第十一位。

明治二十九年創部の野球部が残した記録である。

日本の学生野球の基礎を作った旧制一高（東京大学教養学部の前身）が、日本人として初めてアメリカチームを大差で破った記念すべき年、それが明治二十九年。この勝利で、当時の野球熱はますます全国に広がり、地方に散った一高生や愛球家たちが、武士道に倣った野球道の「一高野球」を中学球児に仕込んだ。静中では柏原知格がその先鞭である。

明治の剛的教育が終わりを告げ、大正デモクラシーの自主自由の校風の静中は、各部の活動も軌道に乗ってくる。大正七年、第一回県大会開催を機に結成された後援会の存在が、野球部にとって幸運であった。有力でしかも私財を投ずる支持者を得て、グングンその力を伸ばしてゆく。同時に学業では上級校進学率も上昇し、学校の雰囲気も活発になっていった。

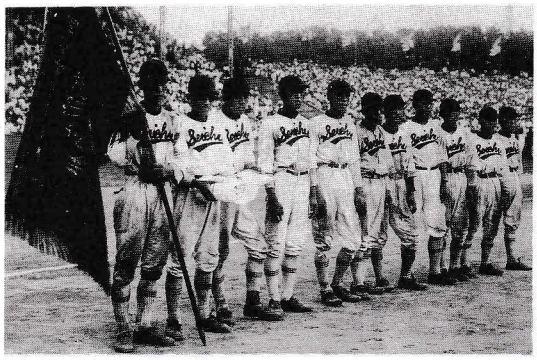
静中の甲子園初登場は大正十三年、きのえねの球場竣工の年。その後、十五年優勝の金字塔を頂点に、昭和八年まで十五回の出場。県下無敵を誇り、まさに「文武両道の黄金時代」を築き上げていた。

この時代を支えた群像。後援者では、復明館眼科医・丸尾晋、写真屋監督・加藤周蔵、島田の資産家・鈴木金苗、弁護士・小淵方輔。球児では、卓越した総帥・福島鐐、紅顔の左腕・上野精三、昭和黄金時代の名コンビ・鈴木芳太郎―吉朗。

しかし、後援会の弱体とともに野球部も凋落の道を下り始める。事態に歯止めをかけようと、「学生野球の祖・飛田穂州」を招いて活を入れる。が新たに台頭してきた島商、静商、掛中にしばしば苦杯を喫することになる。往年の夢は萎むばかりであった。

昭和十年代の野球部は、ファンの非難と屈辱に耐えた苦難の時代、加えて戦争のため、全国大会は中止となり、野球そのものが制限される。しかし、伝統の灯火だけは絶やすまいと頑張る、その部員たちの努力が、戦後の野球部復興に大きな力となり甦って来る。

戦中苦労した部員たち――川島喜八郎、奥野孝、池谷三郎らは、部再興のため東奔西走する。復活した大会、昭和二十一年は、奇しくも創部五十周年に当たり、再生・静中を予告するような戦後の幕開けであった。



大正15年、栄えの全国大会優勝

城内校舎に移った二十二年、他校に先駆けて後援会が結成され、監督に鈴木芳太郎を迎える。とそれまで沈黙していた伝統の底力が吹き出るように、見違えるような成長を遂げて来る。「森山・中尾のバッテリー」を中心とした守りのチーム、これで十六年の長いトンネルを抜け出て、校名も新たに静岡一高として、甲子園にお目見えするのである。以後静岡城内高で三回の出場、僅か五年で静中野球は復活、その後の静高野球部発展の基盤が確立したのである。

大正中期、そして戦後、いずれも時宜を得たような同窓後援者の協力があったこと、野球部は全く果報者と言わなくてはならない。

二十八年から「監督は教師」の方針で、田口一男、野島譲、船川誠、そして八木道政と受け継がれている。戦後十七回の甲子園はすでに戦前を凌ぐ記録である。

昭和三十五年法政二高との決勝戦、四十年センバツの強打線、爽やかに軽やかに甲子園を駆けめぐった「花の四八」植松・水野・白鳥たち。これらは記憶に新しい。

五十三年の「創立百周年に甲子園へ」。その過度の期待と重圧。そのハンディをサクセス・ストーリーに書き換えた部員の努力。彼等の残した感動は、重く深く、部史に記されている。

高校野球ファンの作詞家・阿久悠さんは、「甲子園」をこう表現している。

少年の男を磨く所。
失われた家族の神話が唯一
残された巨大な父親。
素晴しい男をつくるための、
妥協のない巨きな父親。

創部百年の野球部が、この巨きな父親と三十三回目の再会するチャンスは二度。平成八年センバツは、秋季大会で浜工に二―一と惜

（次ページ下段へ）

21回を迎えた平成七年度総会

153名参加して歓談、懇談！

力強い大石会長の挨拶

平成七年六月二十三日、第21回関東同窓会総会は新日本証券の大食堂で盛大に開催された。

42期の大先輩から111期の若人まで百五十三名が集まり、まず校歌を斉唱し、司会者荒谷じつ子副会長（68期）が開会宣言。

大石厳会長（53期）が「最近の社会情勢は、不景気が依然として続いているうえ、阪神大震災やサリンなど気が滅入るようなことばかりであるが、まず同期を横糸に、その前後を縦糸として結び付け、同窓会の結束を更に固めてほしい」と挨拶され、続いて母校教頭と角替副会長（70期）から母校の現状報告と百二十五周年記念事業について報告があった。

次に平成六年度事業報告、決算及び監査報告があり、承認可決された。続いて平成七年度事業計画と予算案が議題となり、諸般の事情から年会費をやむを得ず千円値上げしたいとの提案があり、これも満場一致で承認可決された。

なお、役員改選の年にあたり、大石会長以下全役員留任の案が承認された（任期三か年）。

懇親会は最長老の岩波信平顧問（42期）の音頭による乾杯で始まり、先輩・同期・後輩が期を越えて和気藹々、歓談の輪が会場一杯賑やかに広がる……。

例年通り、郷土の名産や料理に近くて遠い静岡の味をなつかしむこともできた。

世代を越えた懇談は二時間余りに及び、お互いの健康と再会を約して総会は幕を閉じた。

（68期　雨宮明生）

その後の同窓会活動

（平成7年6月～11月）

◇**第11回印高会ゴルフ会**
6月2日（金）
箱根カントリー倶楽部
参加者…24名（初参加2名）
優勝…萩原多賀男（68期）
2位…伊東　守（62期）
3位…富田駿介（76期）

◇**役員会**
6月13日（火）
新日本証券食堂にて　13名
・総会の準備ほか

◇**第21回総会**
6月23日（金）〈別記〉

◇**幹事会**
7月27日（木）
新日本証券食堂にて　32名
・総会報告、意見交換
・会報39号の発送依頼など

◇**役員会**
9月12日（火）
新日本証券食堂にて　10名
・同窓会運営の意見交換など

◇**同窓会合同役員会**
10月21日（土）午後2時
静高校舎・一階会議室
関東支部より上杉副会長出席。

◇**同窓会平成7年度定時総会**
11月11日（土）午後1時半
メディアシティ静岡
関東支部より月見里顧問・上杉副会長・後藤監事など出席。

◇**幹事会**（80期代を中心に）
11月21日（火）

井出多米夫顧問（42期）の近況報告

平成五年六月三日に、妻が八十一歳で亡くなった後、娘二人の心配をよそに独居を続けて代理店の仕事をしておりました。ところが平成六年三月末に突然倒れ、千葉市郊外にある甥の病院に入院する事になりました。

腎不全からくる尿毒症にかかっており、二時間遅れていたら命がなかったと言われました。腎臓病専門の千葉社会保険病院に移り一か月半入院、その後、甥の病院に戻りそこから週一回、透析に通っておりました。幸い病状が好転したので今年の四月に退院し、鎌倉にある長女の家に同居することになりました。

現在は、週二回（月・金の午前中）長女の家から、車で十分の湘南鎌倉病院に透析に通っております。代理店の仕事の方は、戸塚に住んでいる次女が資格を取り、継いでくれているので、安心して任せております。

去る九月三日の江の島会には、三年振りに出席し懐かしい諸兄の顔に感激し、久し振りに応援歌を、石川君や月見里君等と歌い、大

（前ページ下段より）

敗して、夢は潰えた。

自分の邪念や妥協を克服する。戦う相手は見えざる己かも知れない。現役球児の精進を心から期待しよう。

いに愉快な一日を過ごしました。また来年もぜひ出席できるように頑張るつもりです。

毎日朝晩、近くの公園に欠かさず散歩をしていますが、なかなか遠出ができず残念です。娘の運転で車で行ける範囲は、出かけたく思っています。お近くにおいでの際には、どうぞお立ち寄り下さい。

▼顧問の42期井出多米夫さんのご近況について、長女の永野美恵子さん（〒248　鎌倉市笛田一〇七一一〇）からお知らせいただきましたのでここに掲載し、井出さんのご清栄を心からお祈り申しあげます。

（編集子）

同期会など

四五期

ここ暫く同期の近況報告を怠り恐縮です。その間残念ながら六名が他界され、昭和五十七年度には二十二名だった仲間が現在は十一名となり、残った方々でも病気療養中や足腰の衰えで外出困難の人が多くなりました。そのため昭和六十年以来奇数月の第二火曜日を定例日として続けて来た同期の集会の催しも中止を余儀なくされました。寂しいことです。

先日電話で各自の近況を伺いましたので、要点だけですがお知らせいたします（敬称略）。

○伊藤敬三　胃潰瘍の手術後、貧血気味で時折めまいあり、外出は控えている。病いの夫人と労り合いながらの生活。

○蝦原一郎　脚がしびれ歩行に難あるも自転車は利用できる。近所の人や仕事での知人と交わり楽しんでいる。

○柏木千秋　定例集会の常連。本年六月二十三日発行の関東同窓会報第三十九号の巻頭に彼の手記が掲載された。元気である。

○黒田明彦　脳梗塞を患って十年、専らリハビリに病院通い、療養の生活。脚がきかないが、手押車を利用する。頭は安定し元気。

○下川猛　生活に刺激が無く仙人みたいな感じ。腰痛のため外出は控えている。用たしには自転車を利用している。

○竹下定吉　相変らず脚が悪くて歩行不能。

○田附敏三　定例集会の常連。本年六月末に夫人他界。ここに来て漸く気持ちも落ち着き、お子様の家族と同居で元気。

○速水基夫　定例集会の常連。このところ「かんせい肺炎」を患い入院したが目下自宅療養中。

○松林晋一　定例集会の常連且つ世話役。かつて心筋梗塞を大手術に堪えて克服し、現在会社（建築関係担当）勤めである。夫人も今年難病で大手術を受け、目下自宅療養中。勤務通勤且つ夫人の介護、そして家事（食事作りも含めて）等一切に取組み奮闘している。

○鈴木弥門　身障で寝たきりの女房の介護が生活の主軸。子供達に助けられて何とかやっている。私自身は脚腰の痛みや痺れが気になり、九十歳までゴルフをやるぞの願望が怪しくなってきた。

●物故者　佐野理平、大石清、須山達夫（平成四年）、草野哲（平成六年）、堀正治、石上稔（平成七年）。

（註）佐野・大石・草野の三君は定例集会の常連でした。

以上極めて簡単な報告ですが、皆様が旧友と電話等で話し合い励まし合って旧交を温める際の資料となれば幸いです。

終りに物故者のご冥福を、病気療養中の方々の一日も早い全快とを合わせてお祈りいたします。

（鈴木弥門）

五三期

今年の総会は四月十二日、焼津市浜当目の焼津グランドホテルで催された。当地は虚空蔵山に近い崖の上で駿河湾一帯から富士山の眺めが素晴らしく、近景の崖には広重ばりの松が突き出ているという凝った景色である。

受付で挨拶も早々に勝又君の計報を伝えられてショックであったが、総会は再会の喜びに包まれて和やかな一時となった。総会に就いては九月配布の静中静高同窓会報九十七号靱矢君の記事に詳しいので省略するが、当日の出席者は夫人四名を含み三十名、関東からは桜井、園田、山菅、月見里の四名であった。

翌日はホテルのサービスでバス旅行、静岡旧跡巡り。

母校では同窓会事務局の七九期甲木先生に迎えられて校門前の桜の下で記念撮影。六十余年前の入学記念写真も此処校門の桜が満開であったことを追懐する。

浅間神社参拝。鈴木宮司の顔で奥の本殿まで拝観したり御供物を頂いたりでありがたかった。

両替町の「あなごや」で鰻丼昼食会、勝又君の葬儀に出席の新間君達も顔を見せたり話は尽きないが、来年の再会を約しつつ一時過ぎに散会した。

近頃会っての話は先ず健康問題になるようだ。この年齢になっては部品の一つ二つは損耗が出ても当り前、早く発見し早く処置するのは勿論だが、意欲的な生活と機能回復の努力が勝敗を決するのではなかろうか。その点徳永君は昨年胃の手術を受けたが今年の四月には古墳研修会の九州旅行に出かけた由、敬意を表さねばなるまいと思う此の頃である。

（月見里得知郎）

写真は校門前。前列右から荒木、桜井、清水知行、松永（小田）、新村、鈴木厳夫。後列右から小宮、靱矢、小嶋、川手、望月芳郎夫人、新村夫人、芹沢、園田、月見里。

五五期

秋晴れの十月二十日、平成七年度同期会がいつもの四谷「山宮」で開催された。

今年は、静岡で長年同期会の世話役をつとめてくれた山本禮司君逝去。葬儀に参列した相川君からの報告では、読経も線香もなく、会葬者が各自白菊の花一輪ずつを供えるだけの彼らしい清楚な式であったとのこと。また、昨年十一月に吉川鐺介君が、本年十月には武井富夫君も他界。そういう年代なのだろう。

人生をマラソンや障害物競争にたとえることがある。私達世代は戦争により二十代で夭逝した者、その後の経済復興のダッシュが祟ってダウンした者などコース半ばでの退場が多い。必ずしも弱いものが早死にし、丈夫な者が生き残るというわけではない。

かつては「死」という言葉を口にするさえ忌わしい思いがあった。しかし、いつの間にかそれはつっかけ下駄で隣へ行くような気安さに変わっている。そこでは多くの級友がガヤガヤと同期会をやっているかも知れないから。

さて、こちらでの同期会は次の六名の出席であった。

宗　四朗、辻　弘、戸塚正五、長沢栄一、法月重雄、日比光明。

勿論たまたま都合がつかなかった者、体調の勝れなかった者もあろう。それにしても淋しい集まりだったろうって？　ところがどうして、何時もと変らぬ昔話で他から言葉を挟む隙もないほどである。だれそれの思い出、その後の消息、あいつは目立たない割に出来た、俺の成績は何番位だったなど、当時なら相当神経に障るような話題が笑い話になっている。

久しぶりのこととて別れ難い思いで、喫茶店での二次会となった。話の続きは思い出すままに静岡名物のこと、例えばシラスの釜揚げ、桜えび、黒はんぺんに山葵漬、小饅頭に安部川もち。そのうえこれらを扱う老舗とその場所、町名等等、お互いの記憶を確かめ合い、おいしかった味を思い起しながら尽くるところを知らず。

周囲の喧騒に負けじと次第に声高となり、これが冥府と隣り合せの連中かといぶかる程であった。

（日比光明）

五七期

拡大同期会

月見里君の、かねての抱負が実現した。それは、同期の前後の期の方々にも、私共の会である岳南会に、随時、参加していただき、一夕の歓を共にするというものである。お互い、時間に余裕のある年齢に達し、交遊の範囲を拡げることは、大いに意義があろうという趣意である。八月七日、本年二回目の岳南会に、六〇期の上杉副会長が、ゲストとして出席されたので、右の希望が叶えられた。上杉君と私共とは三年の違いがあるが、それだけに話題も広がり、楽しい過去の思い出にひたることができた。厚くお礼申し上げる。

三君受勲のこと

時期はずれになったが、本年春の叙勲で、わが期から、三人が勲三等の栄誉に輝いた。岩柳順二、久保田誠三、坂田秀雄の三君である。永年の研鑽努力の賜であることはいうまでもない。心からお祝い申しあげる。

（影島利邦）

六四期

耐冷―不激、耐苦―不躁、耐煩―不競、耐閑―不随、この言葉は「冷ややかにされることに耐えて、感情を高ぶらせず、苦しみに耐えて心を騒がせず、煩らわしさに耐えて人と競い合わず、暇に耐えてなお人のいうとおりにならない」という意味だそうですが、この考え方は人生のすべての時期に当てはまると思いますが、なかでも最後の「耐閑―不随」は我等六十五歳の者にとってはとりわけ深い含蓄をもつ言葉だと思います。

働き盛りには、たっぷりと暇のある人たちを心から羨やましく思ったりしたが、でもいざ我が身が定年になると、膨大にある暇に耐えるのは実にむずかしいものだと痛感します。同期の友と会うのが心待ちになる今日此の頃です。

年一度の会合、**七月七日**は曇、本年より場所を新橋より田町駅前の「道灌かがり」に移した。理由は中華より和食の方が健康に良いのではという意見をとり入れた事。

出席者は例年と同じく二十五名が顔を見せた。卒業以来四十七年振りに自治労役員の酒井謙弥君、十年目位か愛国製茶社長の馬場泰男君、三年振りの符野達彦君、静岡の同期会よりも東京の方が面白いと毎年静岡、清水よりわざわざ上京してくれる山下啓也、時田勝博の両君など。

会は渡辺素夫君の迷司会で始まり、卒業五十周年を記念して文集を作りたいと、栗田行雄君の提案があり、平成八年十二月末迄に原稿を提出する旨決定した。毎年諸兄の味わい深い話を聞き感嘆しているが、本年は敗戦五十年という事もあって、益頭尚文君の敗戦日に祖父が玉音放送を聞いた時、「これでやっと薩長の政治が終った」といわれた事、徳川藩の重臣らしいと思った。何故三八銃が昭和二十年迄も続いたのか、鈴木明

郎、吉井駿亮、仲野実、塚本光彦兄等が色々熱弁を振るい、会は大いに盛り上った。

世話人代表の名波倉四郎君も病が完治し元気にライオンズ代表として韓国に出張し、残念ながら欠席。毎回元気な姿を見せてくれる竹内豊、浅井幹夫、杉本哲、長谷川直和、望月康逸、長島健、山本和彦、増田政雄、増田誠男、松下一男君等は所用のため、また八木綱三君は体調不良で欠席、残念。

相変らず「岳南健児」と応援歌を高唱し、来年正月に加藤満君のブリモベアで新年会を開催する事を約して散会した。

十月五日（晴）、第二十二回六四期ゴルフの集いは恒例の伊豆大仁カントリー倶楽部で開催した。集いし壮年は十九名。常連の大石次男先輩、新井彰、永田進一、稲森照男君等欠席。

思えば昭和五十六年より十四年間一回も中断することなく継続出来たことは、同期の仲間の暖かい支援の賜と感謝あるのみである。最初は六人位で愚娘も参加させていたが、年を経る度に増加し、現在は大体二十人位が春秋に白球を追って一日を昔に返って遊んでいる。気がねないということの素晴しさを満喫している。

優勝は五年間精進した漆畑輝夫君で、昼食と途中の茶屋でガソリンを沢山補給の効果絶大だった。二位は三年振り出場の蛭川博之君、ブービー賞は韓国出張前の調整ままならずの岩本吉雄君、ベストグロスは伊藤剛君、前回優勝の川口実君は五位、持病の腰痛にも拘らず頑張った渡辺宏一君は十一位、女性と一緒に廻った風間政彦、佐野旭、河村勉君は気づかいのため振わず。パーティーの席上、特に静岡の衆の特別の希望で渡辺素夫君の飛賞の挨拶があり、手ぶり身ぶりのおかしさに一同大喝采した。村上喜代二、塚本光彦、神谷武男、漆畑茂、鈴木高保、時田勝博君等々お疲れ様でした。石原良昭君の閉会の言葉「来年春の西富士ゴルフ倶楽部で再会しましょう」で、落日前の伊豆を東西に別れた。

（野澤正憲）

事務局へのご連絡は……

〒153　目黒区上目黒2－18－13
山中ビル　タカラ歯科医院内
静中・静高関東同窓会
藁科名雄（87期）
電話　〇三－三七九二－三五八〇
（午後1時～6時の間に）
FAX　〇三－三七九二－七八二八

第48回　江の島会

立ち退き請求に仲々応じない夏に秋が腹を立ててもみ合っている様な、そんな九月三日、いつもの恵比寿屋旅館で第48回江の島会が開かれた。

▼当日の参加者

母校から田中祐司校長が、同窓会本部から安池得之副会長（67）と事務局の北條駿教頭（76）の2氏が、関西同窓会から志田清氏（53）が御出席下さった。

地元は当恵比寿屋経営者永野清氏（35）以下38・42・43・48・51・53期各1名、59期5名、61・62・63・64・65・66期各1名、67期3名、68期3名、69期2名、70期2名、71期2名、72期1名、77期9名、84・85期各1名、合計46名、内、夫人同伴2組。

▼総会

奥沢徹幹事（59）司会により正午開会。佐伯正剛会長（51）は、女性や若い層の出席が増えて喜ばしい事、また母校校長・同窓会本部からの御参加、石割正先輩（38）の御参加への謝辞を以て会長挨拶とされた。本部の安池副会長と事務局北条教頭から、川村春雄同窓会会長が心ならずも欠席された事、かつての村松江の島会会長の思い出、母校百二十五周年記念行事の事等を、続いて田中校長から阪神淡路大震災罹災同窓生の状況女生徒が増えてその成績が良い事、将棋・水泳・野球の活躍状況等の情報を御祝辞と共に頂いた。関西同窓会の志田氏からは罹災時の電話のかけ方等のノウハウの提供、また母校の甲子園出場が最も励みになる、と期待も語られた。

議事は、事業・会計・監査の各報告が承認されて終了した。

四月に当恵比寿屋・永野清氏の令息の夫人が病歿された。この事について佐伯会長から報告がされ永野氏から御挨拶があった。当会の為に色々御世話下さった故人を偲んで合掌。

▼記念撮影……いつも通り。

▼第一懇親会

十三時開始。司会は黒田秀幸幹事（67）。校歌の指揮発声は、いつもは極め付きハリのある井出多米夫氏（42）だが、今回は御不調という事で成岡英彦氏（67）に代わった。こちらは極め付きのダミ声。乾杯の音頭は石割氏。御元気そのもので、少なくとも百歳までは張り切る、とその意気や壮。

自己紹介で衝撃的だったのは天野昭氏（61）。軟派して校長に殴られた――あたりはまだ常識的、県立（城北高校）や裁判所等の表札を外して来て燃やしてしまったとか。この方、海兵へ進まれた由、攻撃精神があふれてはみ出したに違いない。

77期は女性の出席が多く、その辺りに人だかりが目立った。たかっているのは67期よりも（卒業回期が）若い人達。かつての女性払底世代と見た。育った時代のなせるわざか。ともあれ賑やかに話は弾んで、さて、その続きは――。

▼第二懇親会

潮満ち風やんで波静か。天の雲次第に退いて陽光燦々。第二懇親会場は江の島弁天橋上のいつもの屋台「いそみ」。空と海に囲まれて開放感満点である。沖、でもないがまあその辺の白帆も良い感じに浮いている。水際までゴザを敷いて二十数名、美酒美おでん美女美男で再び歓談。

やがて辺りが茜色に包まれる頃、再会を約して江の島を後にした。「また来年、いつものようにここで会おう」

なお、佐伯会長労作の「七福神のうち特に恵比寿さまについて」が配布され、エビスの表記方法が幾通りもある等が紹介された。

（68期　塚本浩司記）

回想・随感・近況など

戦後五十年に
旅順の母校を偲ぶ

43期　西沢　純三

一、入学時代の思い出

私は静中時代から工学志望だったが、旧関東洲・旅順市にあった旅順工科大学予科に入学することができた。

殆んどが内地からの出身者で外地出身者も数名いた。中国人学生も本校の予備科を経て数名入学した。一学級は六十名定員で全員も三百六十名ばかりの少数教育、大陸では唯一の工科の殿堂であった。創立は日露戦争後日本の植民地となった明治四十三年で、本年で開学八拾五周年を迎えることができた。

昭和五年四月、生れ故郷の静岡より夜行列車で出発したが、駅で金沢の第四高等学校に入学した野川実（軍医になられ戦死）君と一緒となり、共に入学を喜び双方の家族に見送られて出発した。同君とは米原駅で別れ、翌早朝三宮駅に到着した。港に近い宿屋で小憩して、大桟橋で大阪商船大連航路の香港丸に乗船し、門司港経由で三日目の朝大陸の玄関口の大連港の大埠頭に接岸した。

前年に入学していた静岡中学同級の村松信（故人）君の出迎えを受けて安心した。

埠頭の大玄関を出て初めて見る二頭立ての馬車に乗せられて近代的大通りを通り、大連駅に到着して旅順行の列車で旅順に着いた。

再び馬車で予科生の興亜寮に入寮。静岡中学からは四十一期の岩川完先輩（故人）が大学に在学されていたが、私が三人目で廃校になるまで合計十名が進学している。静岡県内からも各校より進学しており、現在でも静岡県人会があり親交を深めている。

去る七月二十日沼津にある静岡健保会館で県人会を開き御夫人を含めて十八名が出席した。

昭和十一年三月卒業して技術屋の卵として帰国し東京で就職したが、入学した時には級友達に東京には学校が沢山あるのに何故満洲へ行くのかと言われ、卒業の時には何故日本に帰るのかと言われたが、数年間で時代の変遷を感じさせた発言である。

日華事変以後多数の日本人が外地へ進出していき大陸開発に協力したが、残念ながら中国大陸への侵略は過去の欧米列強の植民地政策を手本に軍部が引き起してしまった。世界の趨勢は不戦条約締結の下にあったが、軍事行動が強行されてしまった。

今は亡き、母校旅順工大。現在中国軍の病院。

二、創立八拾五周年を迎えて

平成七年五月十四日母校の創立八拾五周年記念大会を約三百名の出席を得て、東京九段のグランドパレスホテルで盛大に開催することができた。昭和二十年八月二十三日ソ連軍の旅順進駐で追放されて廃校になってから戦後五十年になるので、今回在りし日の母校を偲んで過去の資料・写真等を多数収集し、同窓生各位の協力で当日展示することができた。これらは殆んど松本市の旧制高等学校記念館に寄贈して永久保存していただくことになっている。

三、第十回信州寮歌祭

旧制松本高等学校信州白線会の主催で、去る六月十八日旧制松本高等学校講堂で開催され、全国より四十三校が出演した。わが予科も二十五名で参加し、逍遥歌「唐紅の花衣」を高吟して好評を博した。退場時にはダイナマイト節で力強く退場した。

出演後記念館の特別展で外地五校（京城帝大予科・旅順工科大学予科・旅順高校・台北帝大予科・台北高校）の戦後五十年外地校特別展を見学し、併せて記念館の展示室を見学した。

記念館には私が予科時代に購入した鈴木バイオリン製作所の創立者鈴木政吉氏製作第八号機が展示品の逸品として『玄海灘を往復したもの』として話題を呼んでいた。松本市在住の鈴木鎮一（九十六歳）氏は永らく才能教育研究会会長で近々完成する鈴木鎮一記念館にこのバイオリンを寄付し永久に保存される。

四、第三十五回日本寮歌祭

平成七年十月七日（土）恒例の日本寮歌祭が日比谷公会堂で開催され、全国各地より五十七校が出場した。

戦後五十年特別企画として哈爾浜学院・満洲医科大学予科・旅順工科大学予科・旅順高等学校・京城帝国大学予科・東亜同文書院・台北帝国大学予科・台北高等学校の八校が一堂に会して連続出演して外地所在の母校の寮歌を高唱して昔時を偲ぶことができた。

戦前・戦中・戦後を通じて現地学生と机を接し共学し、理想を求めて青春時代を過した亡き母校を偲ぶ事ができた。

コラムニストの内輪話

51期　宮野　守信

コラムニストがコラムの材料がなくて困ると、季節や花鳥風月を話題にしたり、入学、入社試験の季節であれば、珍問奇問、珍回答を並べて笑わせるなど、こういうのを見ると、材料不足に困っている様子が見えるようで又面白い。

然しそこは名文家のこと、時に諧謔を交え、あるいは「落ち」をはさみ、諺、名言の類をちりばめ、それなりに名文にまとめて、いわゆる「読ませる」文章に仕上げてある。

この「書くことがなくて困る」という苦労話が又コラムの一つの材料になっている。ここではそういうコラムのいくつかを紹介してみたい。

朝日新聞の「天声人語」で名コラムニストとうたわれた荒垣秀雄氏が亡くなった平成元年七月九日の読売のコラム「編集手帳」。「記者になったら何をやりたいか」。「夕刊の三行短評みたいなものを書きたいと思います」。

大正十五年、朝日新聞の面接試験で荒垣秀雄氏は、そう答えた。無論「みんなに笑われた」が、昭和二十一年に「天声人語」を書けと言われた時には、数日間答えを保留したという。が、否も応もない。「アブラ汗をたらして」「苦吟の連続」だったと書いている。

締め切り時刻が迫る。いらいらして机の横木を蹴りつける。十七年半もの間に、木がすりへってしまったというのは有名な話だが、「カニはおのれの甲羅なりの穴しか掘れない」とさらりと言ってのけた。（……中略……）

博識だった。いわゆる「花鳥風月」をコラムに採り入れたのは荒垣さんが最初といわれる。時事問題も含めて、端正な文章に定評があった。それについても「人語あって天声なし」と照れた。（以下略）

荒垣秀雄氏ほどのコラムの名人にしてかくの如くである。コラムの、あるいは文章のむずかしさということを改めて思い知らされた。

次は、やはり朝日の「天声人語」で声名の高かった深代惇郎（既に故人）氏の昭和五十年四月十六日分を紹介する。

毎日コラムを書く、心の動くような話がそう毎日見つかるわけではない、机をカリカリとかきたくなるようなこともある、もっとも「書く」とは「ひっかく」という意味からきたそうだ。昔は木簡、竹簡をひっかいて書いた。

英語の「書く」も板などにくねくね筋をつけること。書くことがカリカリ書くことであるのは洋の東西を問わぬらしい。そこできょうのカリカリは寄席の話をしよう。たまに出かける。懐古趣味にはなりたくないのだが、昔はこうではなかったという思いが強い。

マクラにしても味がない。マクラが下手でうまいはなしが出来るわけがない。「上」という字は下に横棒があるので下が見えません。「下」という字は上に棒があって上が見えませんな。「中」はつき抜けているので上も下もよく見えます。そんなことを言って笑わせて、ふと考えさせたりしたものだ。「道楽を人のほむるや春の風」といった句を作るはなし家もいた。道楽は道に楽しむと書くそうですが、道に落ちると書いても道落です。といったマクラを振っていつの間にか、本題にはいった。円生は「私は芸人で芸術家じゃありません、別に術は使いませんから」といっている。

死んだ志ん生は政府が勲章をくれるといわれて「わたしゃあ、そんな大それたことをした覚えはねえ」とごて気味だった。芸人はうまければよいのだ、という自負があったのだろう。

のんべえ亭主の落語がある。べろべろで帰ってきた亭主をつかまえて、「この上げ潮のゴミめ！」と、かみさんがかみつく。「それは何だ」「途中で、どこにでもひっかかっちゃうからお前さんは上げ潮のゴミだよ」、亭主はタンカを切る、「おめえはゴミだ、ゴミだっていうが、ただひっかかってるんじゃねえ、ゴミにはゴミのちゃんとした了見があって、ひっかかってんだ」、ゴミの気持ちを代弁するところに、芸人の心意気があった。

書くことがないと言いながら落語の断片をつないで、この位面白い話にまとめて読ませる所は流石である。

同じ深代惇郎氏の昭和四十八年十二月三日の「天声人語」をもう一段、紹介させていただく。

毎日コラムを書いていると、きょうは思うような材料が見当らないという日もある。書くことがなくて書かねばならぬときは動物園に電話を入れる、というのが昔から新聞記者の習性の一つにあった。

「サル山のボス争いはどうですか」、先方はそんな話を準備してくれたものだ、そこできょうは上野動物園へ電話したら、「話題はありませんねえ」と、つれない返事。（以下中略）

書くことがなくて、動物園にも異変がなくて、トイレットペーパーも出廻ってきて、雪月花にも感慨がわかないときは政治の悪口を書くといってはふがいない話だがそういう時もある。本人はほかにないから書いているので、そう朝から晩まで悲憤慷慨しているわけでもないのに、コラムだけは次第に憂国のボルテージが上って、自分とはいささかちぐはぐの「書生論」になる。ジャーナリストにはそういう気のひけるところがある。

大分原稿超過で申訳ないが、おわりに、ずばり「産みの苦しみ」《岩波のPR誌「図書」（平成元年七月号）所載の石弘氏（朝日新聞記者）の一文》を紹介する。

「書く人」にとって最大の苦痛は原稿に詰まったときである。人それぞれにスランプからの脱出法がある。平凡なところでは、鉛筆を削り直す、散歩する、机の引出しを整理する……。私は書く意欲が戻ってくるまで何回でも風呂に入る。

新聞社という物書き集団で働い

ていると、ときとして思わぬ脱出法に出くわす。さっきまで唸っていた記者の姿が見えなくなったと思ったら、机の下に潜り込んで膝を抱え込んで瞑想している。この場所が、モノを考えるのに最適だそうだ。かと思うと、便所に入ったきり一時間でも二時間でも出てこない。原稿の締切が迫っているときは、こっちが気が気でない。

以前アメリカで一緒に働いていた先輩記者の部屋からは、よくパチパチという凄まじい騒音が聞こえてきた。覗くと、頭のてっぺんから頬にかけて思いきりひっぱたいている。彼のオツムがだんだん寂しくなってきたのはそのために違いない。その大記者は今も第一線でコラムを書き続けている。読む度に、これを書き終るまで、あの残り少ない毛がどれだけ犠牲になるのかと身につまされてくる。

これは海外支局で一緒に仕事をした後輩記者である。ある夜、彼の家に呼ばれたときに、たまたまこの話題になった。一杯機嫌の奥方が「石さんはいいですよね、お風呂ですもの。ウチなんかアレですから」と少し色っぽい目付でベッドルームを目で指した。御本人は、聞こえない振りをしてひたすら酒を呑んでいた。

静岡の万葉を歩く（その十一）

51期　原崎　郁平

富士市には次のかの有名な歌を彫った歌碑が三つ建っている。

田子の浦ゆ　うち出でて見れば
　　ま白にぞ
富士の高嶺に　雪は降りける
　　山部赤人
（巻一―三一八）

第一碑　富士市前田新田（田子浦港々湾入口の富士見公園高台上）

第二碑　富士市田子（山神社天満宮境内・バス停鮫島下車）

第三碑　富士市前田字茨島（田子浦港カーフェリー発着所前）

第一碑の最寄りの駅はJR吉原駅である。田子浦港を西にぐるっと回り港湾の突端に向かう。右手の高台が富士見公園でその中に歌碑がある。建立は昭和十六年、建立者は田子之浦保勝会長・船山啓治郎である。大きさは高さ一二八センチメートル、幅九十センチメートルで、南西に向いている。揮毫者は沖六鵬先生で文字は白文である。沖六鵬先生は全国的に有名な書家であり、静岡市西草深町に在住しておられた。昭和の始めから戦後まで活躍された方で楷書を得意とされた先生だと聞いている。沖先生の素晴らしい字体を見ていると私が小学生の頃私の悪筆を心配した母親が沖先生の所に行って毛筆を習えと無理やり入門させられたことを思い出す。沢山の子供に混じって毎週通ったが数年経ってもものにならず、遂に諦めた母親が習字教室に通わせることを断念した記憶がある。

〈右の写真は第一碑〉

第二碑はそこから西方一キロメートル位のところの山神社天満宮の境内にある。建立は昭和十二年六月、建立者は渡辺喜作、揮毫者は従三位伯爵源重行で文字は白文である。大きさは高さ一四一センチメートル、幅一四九センチメートル、第二碑から西方約三キロメートルの所にロシア軍艦ディアナ号の錨とブチャーチン提督の銅像がある（バス停で三四軒屋団地入口下車、近くの緑道公園の中）。一八五四年（嘉永七年）十月にディアナ号は下田港で安政大地震に逢い破損した。修理の為に戸田に向かったが強い西風に流されて漂流し当時の宮島村三軒屋沖で沈没した。この時宮島村民は地震直後にもかかわらずロシア兵上陸のために献身的に協力した。この錨は永く海底にあったのを昭和五十一年八月に引き揚げられたものである。

第三碑は田子之浦港の根元のカーフェリー発着所の前の広場にある。建立は昭和六十一年三月、建立者は富士市教育委員会、揮毫者は神宮文庫本による書体で、白文である。この歌は山部赤人の詠んだ「富士山を望む歌」という長歌に続く反歌である。第三碑はこの長歌と反歌が、ニョキニョキ立った七本の石の柱に全文が彫ってある。大きさは最長のものが高さ五六三センチメートルある。晴れた日には富士山を背景に記念撮影が出来る。

この三碑は富士市在住の学友山中元司君のご案内によるもので、ご好意を心から感謝します。

平成の大東亜共栄圏（その三）

60期　黒田武之助

前回（第39号）でフィリピンをとりあげました。今回は、その続編としてマニラで体験したクーデターをまとめてみました。

一九八九年十二月一日の早朝、日航マニラガーデンホテルの部屋でTVのスイッチを入れた。午前五時（日本時間午前六時）。衛星放送でNHKニュース「マニラでクーデター発生」。直ちに調査団メンバー六名に連絡してロビーに集合した。我々は日本の政府開発援助（ODA）国際協力事業団の工業団地開発の調査団であり、当日はパターン輸出加工区へ陸路車

三台に分乗して出掛ける予定になっていた。

先ずは情報集めだと判断、ホテル側や大使館筋の見解を聞き出しパターン行は中止。ホテルで待機していた。大統領官邸がプロペラ機2機に爆撃されたとの情報、午前中は比較的静かだったが夕方から反乱軍がマカティ地区に入り銃撃戦が激しくなって部屋から出られない。それでも食事はホテル内で自由にとれたし不安は感じられなかった。しかし夜になって銃撃戦が激化し、部屋の窓側から離れるようホテル側から指示が出された。我々調査メンバーは、パターン半島へ出掛ける予定で軽食と飲料水を用意していたので数日の食料は心配していなかった。また東京への直通電話は、支障なく通話が出来たため、東京の自宅からの情報が我々を安心させる役目を果していた。十二月二日、昨日の銃撃戦を見てホテルは正面入口をバリケードで閉鎖した。朝食はコーヒーショップが開いていたので平常と同じ状況でとることが出来た。昼間も二時間に一回くらいの割合で銃撃戦があり、夕方にはコーヒーショップも閉鎖となる。

十二月三日朝から六日に開放されるまでのメモ書きから主なものをご紹介しましょう。

●東京の自宅から電話

㈠NHKニュースでマカティ地区の銃撃戦の様子が出た。

㈡JALが明朝八時発マニラへ向けて出発の予定。

㈢NHKニュース。赤十字の発表で死者約五〇名、負傷者二〇〇名とのこと。

●朝9時50分銃撃激しくなる。10時5分ホテルよりアナウンス。

「お客様全員地下室に避難して下さい。」

（地下室にて）10時～12時20分

㈠約一五〇名の客地下に集合。

㈡ホテル側から禁煙指示。ジュース、サンドイッチ配布。

㈢12時20分銃撃戦、一時終った模様。お客様は部屋に引上げて下さいとの指示。

●日本大使館より指示

㈠今朝マカティ地区とアギナルド基地周辺で銃撃戦あり。ホテルから外出厳禁。

㈡マニラ国際空港は閉鎖のままOPENの目途つかず。

十二月六日朝4時半ホテル側アナウンス――早朝安全な場所に移動するので荷物まとめて部屋で待機――。7時半バス八台ホテル着、全員マニラ空港近くの免税店ビルに無事脱出。我々メンバー全員ミッドタウンホテルへ再移動。やっと部屋に落付いた。

――。――

約六年前の出来事だったが今もその時の緊張した六日間が目に浮んできます。

一九九五年七月、六年ぶりでマニラに出張し日航マニラガーデンホテルに宿泊した。六年前の出来事は忘れられ、マニラの街も明るさを取りもどし活気に満ち、海外からの直接投資（生産拠点づくり）も活発で日本企業の進出も増加した。フィリピン経済の成長に本格的な気配を感じながら、JALの機上からマニラ湾を眺め帰途についた。

駿河と名のつく植物

66期　原野谷朋司

会社を離れて植物に親しむ生活をしていると、〃駿河〃と名のつく植物には注意が向く。年を重ねて故郷を身近に感ずるようになった故だろうか。

日本では約五千数百種の維管束植物（シダ＋種子植物）が確認されているが、その内の約六割、三千数百種が静岡県内に自生している。植物の多い長野、鹿児島、和歌山、長崎等の諸県を遥かに抜いて、正に日本一の植物豊富県である。県の自生植物については杉本順一氏が先駆的な立派な調査研究をされて名著を遺されている。植物の豊富な理由は、地形・地質がバラエティに富み、気候も南アルプスの高山帯から暖流黒潮の洗う富士山・伊豆半島に連なる富士火山帯、古生層地質からなる駿河と遠州と多様の見本のような環境にあるためである。備わっていない環境要素としては高層湿原と寒流の内陸要素（日本海要素）くらいである。

我々の故郷の駿河を更に詳細にみると、フォッサマグナ線の富士川の東と西とでは大きく異なっている。東駿河は基本的に伊豆と同じ溶岩と火山灰の富士火山帯地質で西駿河の古生層地質とは違う。また遠州は西駿河と類似しているが片麻岩石灰岩地層が入っていて、エンシュウ冠名の植物があることからも分るように特異性がある。我々の故郷の西駿河も更に詳細にみると大崩海岸から安倍川を斜めに横切って竜爪山から梅ケ島に向う古い火山地層があり、梅ケ島シャジン等の特異な植物がみられる。

環境庁は一九八六年から八八年にかけて全国の植生を調査。最近喧しくなっているレッドデータブック（絶滅、絶滅危惧生物種）の基礎データとしているが、この調査結果でみると〃駿河〃の名前の植物は八種ある。

スルガイノデ、スルガクマワラビ、スルガジョウロウホトトギス、スルガスゲ、スルガテンナンショウ、スルガヒメユズリハ、スルガヒョウタンボク、スルガヤマツツジ。

東洋蘭の愛好者は必ず栽培して広く知られている〃駿河蘭〃も同じスルガの名前を持っているが、この蘭は江戸時代中期の東洋蘭園芸ブームの時に中国から渡来した植物。Cymbidium ensifolium (L), Sw.の学名を持つ蘭で、中国名〃建蘭〃、自生地は福建省から広東、広西、貴州、雲南、四川、湖南、江西、浙江省から台湾に分布、変種は更に東南アジアから印度に及んでいるが、日本での発見例は南琉球列島での一例だけ、黒に潮乗って駿河まできたという報告はない。素晴らしい芳香を持つこの蘭に何故スルガの名前が付けられたか、由来を寡聞にして知らない。情報データがあれば是非お教えいただきたい。

西駿河の自生環境は我々が少年時代に肌身に感じて熟知しているもの。皆さんも機会があったら庭

でスルガ冠名の植物を育ててみてはいかがでしょうか。

犬の遠吠え

68期　林　明宏

68期は昭和八年生れが主流ですが、私の知っている彼は昭和九年早生れの成年。渋谷の忠犬ハチ公と同じ年であります。

昨年の成年、彼も六十歳となりました。高校卒業後、大学も勤務先も東京でしたが、この時彼は熊本にいました。単身赴任です。仕事は順調でした。「単身赴任は男のつとめ、単身不妊は女のさだめ」などといいながら、ゴルフ、カラオケと熊本生活をエンジョイしていました。

ある夜、セミナーでホテルに泊っていて退屈した彼は、八時頃かねて知人に紹介されていた、とあるスナックに行ってみました。その日はまだ誰もお客がいません。しかし、歌の好きな彼は上機嫌でママと若いお手伝いを相手にカラオケを始めました。十時が過ぎました。まだひとりのお客も現われません。十一時、十二時…依然として誰も来ません。

「ママ、この店は何時までだっけ？」

「二時までです…」

帰るに帰れず一時まで彼は歌い続けましたが、とうとうその日の客は彼ひとりっきり。二時近くママがソバを作ってくれておヒラキとなりました。歌った唄が60曲。

「なんだ、年の数だけ歌っちゃったなァ」

「よく歌ったわね。でも、このお店ではあなたが2位。この間63曲歌ったお客さんがいたわ」

「へェ、そりゃすごい…」

ホテルへの帰り道、酔った頭で彼は考えました。

（お客がひとりというこんな夜が前にもあったのか。長続きしてほしいなァ…）

――感じの良いお店だけに、一寸心配になりました。

その年の始め、彼は成年の年男として年賀状にこんなことを書き添えていました。

「B面の旅の途中の冬休み」

成年――イヌ、犬、狗、寝ぬ、居ぬ、去ぬ、往ぬ……

年男の〝犬の遠吠え〟……

黛まどかの句集〝B面の夏〟の向うを張ったわけではありませんが、B面人生の熊本からの遠吠えでした。

あの晩のスナックのママから、その後しばらくして、お店を閉めることになったという知らせが入ったそうです。

又それから一年が過ぎました。

彼は今頃どうしているのでしょうか。ひょっとしたら、もう東京へ帰って来てるのかも知れません。

活性経営の知恵

（一）発想の起爆剤に！

87期　藁科　名雄

経営力とは危機といわれる時代に、その危険性のうちに飛躍の機会を見出し行動に移す力です。

90年代は、歯科医院にとって「産業的魅力の時代から医院独自の魅力の時代」へと移り変わる変革期です。今までは業界全体が伸びていたものが、これからは努力を積み重ねているAという歯科医院だけが生き残り、伸びる時代になったということです。まさに「努力の格差」が飛躍のための挑躍台となる「チャンスの時代」の到来といえるでしょう。

また、見ても見えない、見えないけれど何かある成熟の時代です。自分の主観的な価値や好みや判断に基づいて選ぶ時代ともいえます。このような「チャンスの時代」に必要なのは「結果に対応する経営」ではなく「結果をつくり出す経営」なのです。

「努力の格差づくり」とは、患者に対しては心くばりを形にして表現し、信頼関係を確立することです。また業務・庶務全般においては、役割や権限・責任を明確に仕組むことを行ない、具体的なマニュアルを作成してゆくことです。

患者が医院を選ぶ時代（医院が選ばれる時代）に強いのは「提案」です。患者との信頼関係を確立したうえで、「チャームポイントづくり」が心要です。他院と比較して、何がベター（better）か、何がディファレント（defferent）か……ほんの少しだけ余計に、満足や安心のためのアフターケアーができるような装置化をすることが大切です。

従来は「言わないほうが得をする社会」が日本であり、「言わないほうが損をする社会」が欧米諸国でありました。こと歯科医療の世界においては、広告等による差別化が難しいことを考え合せると、やるべきことをきちんとしているならば、安心・信頼・責任感・コンビニエンス・快適さ等を、患者の目に見える形で表現し、それらをセールスポイントとして来院患者に対して堂々とアピールすべきだと思われます。

では、「結果をつくり出す経営」とは何でしょうか。まず自院の現状をより正確に把握し問題点に優先順位をつけ、達成すべき目標を期限つきで設定します。さらに目標達成の阻害要因を考慮したうえで、有効な方法を複数用意し、実行に移してゆくことです。

＊　＊　＊

私は現在、マーケッティングをバックボーンにして歯科医院経営のコンサルタントを行なっております。読者の皆様のなかには現役の経営者や、将来経営者を目指し、牙を磨いているミスター可能性の方々が多くいらっしゃることと思います。本文での医院を企業や商店に、患者を消費者や顧客に置き換えて読んで頂くと判りやすいと思います。

このシリーズから何かを学ぶのではなく、今までとは少し異質な発想で、自分自身の生き方、知識・経験に対して質問されるのだという認識をもっていただきたい。思考が固定化してしまっては、せっかく各人が天から授かった連想力の不思議な力を発揮することができません。知識に接するときに、ただ習うという態度だけでは頭の中で固定され、かえって自分の発想力を制限させることになってしまいます。皆さんの経験や知識・情報を自由に頭の中で歩き回

らせていただきたい。そして拙稿の提案を、自分に対する一つの質問という刺激として位置づけてください。これが起爆剤となり、プリズムのような発想が生まれ、具体的な実行計画や行動のヒントになることを願っております。

出版裏話

90期　荒井　千明

執筆した原稿が十月に一冊の本になって出版された。さて今回の本であるが、話は意外なほうから持ち上がってきた。一年半も前のことである。酒場で、マスコミ・ジャーナリズム関係の人と複数で夕飯を共にする機会があった。このような場合、話題は持ち寄りというより、相手側がこちらの世界を窺うかたちで話が進むケースがしばしばである。

〝こちらの世界〟としては当時、ターミナル・ケアや脳死、キュアからケアへといった内容が、一般社会問題化してきつつある時期であった。立花隆氏や柳田邦男氏といったノンフィクション作家が右のような問題に対して意見を発し一方で梅原猛氏は脳死についての見解を説いていた。同じ頃、哲学者である明治大学の中村雄二郎氏は臨床の知、自然死法などをキーワードに挙げて、日本医師会雑誌に問題提起をしている（同氏は「臨床の知とはなにか」〈岩波新書〉を一九九一年に刊行した）。

◆

「それにしても君たち医者は、相変わらず何も言わないな。言わないということは言えるだけのものを持っていないということか、それとも肯定しているのか。肯定しているのなら、じゃあ一体何を肯定しているんだ。あるいは君らの問題としては、とっくに解決がついてしまっているのか」

言われた手前、違うと思う、と僕は言った。しかしテーマは膨大で、どこから話をしていいのかがよく判らない。話題は急速に現代医療へと向かっていった（脳死を個体死と認めてよいかについては、そのとき意見がふたつに割れた）。しかし、

「臓器移植を定着させていくことに皆が賛成すれば、医療はこれに沿って動いていく。先行している幾つかの国があるのだから、そうなること自体はなにも不自然なことじゃない。だけど、移植や免疫抑制についてもう少し話し合ってもいいんじゃないか、そのあとに脳死の話がくるんじゃあないか」

そう僕は言った。すると、

「だって、移植すれば免疫抑制剤を使うわけだろ。それで長く生きられるんだろう。何も問題ないじゃないか」

◆

その言葉を聞いたときのショックは今もよく覚えている。確かに内容自体には間違いがないし、たぶんそれは多くの人が認める点なのだ。いや、理屈ではなくむしろ事実であるからこそ、僕はうろたえたのだろうと思う。

しかし、少なくとも僕は、移植という問題以上に、表面だけをみて安直に結論付けてしまう見方に抵抗があった。それでは金が無くなったからギャングをやろう、視聴率がいいのだからギャグ番組を増やして何が悪い、といった主張を片っ端から認めてしまうことになる。でも――本当に、それは情けないほど移植の本質なんて話題にのぼっていないのだ。だから僕は移植をするのにどうして免疫を抑制しなければならないかについて、生体側からみた反応を僕自身、酔いが醒めてしまうほどにしゃべった。

◆

「それ、今言ったことまとめてみたら？　本になりそうな内容なら版元をあたってみてもいいよ」

「だけど僕は移植を直接手掛けているわけじゃないし、免疫の仕事だってプロじゃあない」

「君の言うプロが何かは知らないけど、君だってアレルギーやっているんだろう。少なくとも俺達よりはその辺のことよく知っているわけだろう。今、君がしゃべったことは俺は全く知らないが、そうした情報は君ら医者連中がもっと提示しなくちゃいけないんじゃあないのかい？」

もっとインパクトがあった方がいいのでは、という意見もあったが『漂流する現代医療』（同文館）という題名に落ち着いた。あの時しゃべりまくった内容は三の章／臓器移植に登場させた。「とてもマジメな本」なので正直な話、あまり売れないと思う。だから〝裏話〟としてこっそりお伝えした次第。

「こえ」

この欄は「もう一つの総会」です。気軽に筆を執り、送ってください。

43　長戸　寛美

足首の痛みでステッキの厄介になっているが、いささかムリをしてでも、週一、二回都心での会合に出るようにしている。友人・知人の顔を見たり、話をしたりするのが一番の楽しみだ。そのほかには本を読むこと。それも、長いものをジックリ克明に読むことだ。

45　松林　晋一

勤務中の㈱サン・オンワードの事務所を左記に移転しました。今後ともよろしくお願いします。

〒103　中央区東日本橋1―3―15

（電）三八六五―八七六一

48　近藤　希賢

どうやら大きな不具合もなく傘寿を迎えることが出来る様です。

仲間と都合のつく限りゴルフを楽しんでおり、これが健康保持に役立っていると思っています。

52　小川善次郎

第39号拝受。43期から100期にわたる皆様の記事を拝見し、60年に及ぶ年月を静中卒業生として生きてきた喜びをかみしめております。100期の方が海外協力隊のアフリカでの活動に参加される由、若い皆さんが広く国際的に活躍されることは、余生を生きる私にも希望を与えてくれます。

57　名取　保明

幹事の方ごくろうさまです。五七期は関東岳南会を年3回、本会

静岡だより

静岡を愛した中勘助
「文学記念館」がオープン

静岡は、東部や伊豆に比べて文学の香りが少ないと言われるが、無垢な子供の世界をあざやかに描いた自叙伝的な小説『銀の匙』で知られる中勘助は、数少ない静岡ゆかりの文人である。戦時中の一時期、病気静養と疎開を兼ねて静岡市に住んだ中勘助を偲ぶ「中勘助文学記念館」が六月一日にオープンした。

中勘助は、昭和十八年十月から二十三年四月までの四年半を、夫人とともに静岡市の服織で暮らした。この間の生活は、日記体の随筆『樟ヶ谷(しょうがや)』や『羽鳥』に収められているが、中勘助の実生活は、むしろ私は、静岡市在住の実業家であり随筆家である稲森道三郎氏の『一座建立―中勘助の手紙―』によく表されていると感じる。

稲森氏は、森鷗外の娘で『晩年の父』などを著した小堀杏奴の言葉を借りると、〃中さん崇拝者〃であり、在静中の中勘助を先生と仰いでひんぱんに訪ね、文通を重ね、何時の間にか家では〃中サン大学〃の名称で呼ばれ、中勘助が東京に戻ってからも親交を続け、千通近い手紙が、その手もとに残された。その書簡を中心に、稲森氏と中夫妻の日常をまとめたものが『一座建立』である。

昭和六十二年に六興出版から上梓されたこの作品は、今年一月に『中勘助の手紙―一座建立―』と題して中公文庫でも刊行された（題名のメインとサブが逆になってしまい、私としてはいささか残念に思うのだが）。

中勘助は、明治十八年に東京神田で生を享けた。十八歳で一高に進み、ちょうどイギリス留学から帰国したばかりの夏目漱石に英語を学んだ。その後東大の英文科に入学してからも、一高に引続いて漱石の薫陶を受け、その影響もあって国文科に移り、創作活動に入った。

卒業後、二十八歳で『銀の匙』を著し、漱石の推薦で東京朝日新聞に掲載され、これが世に認められるきっかけとなった。師弟としての夏目漱石と中勘助の琴線は、随筆『夏目先生と私』に読み取ることができる。

その後、『提婆達多』『沼のほとり』『菩提樹の蔭』『しづかな流れ』などの作品を次々と発表、服織への疎開につながってゆくのだが、ここで中勘助は、立場こそ逆になったが、四十年前の漱石との師弟関係を、より深くより固い形で、稲森氏と築くことになる。

冒頭、病気静養と疎開を兼ねて静岡に―と記したが、実のところは、中勘助の作品に心を刻むように取り上げられる母や嫂や兄などの死を経験した後の、心奥の痛手を癒すための静養が、来静のはじめの目的であったと思える。

そして、三島の連隊で終戦を迎え帰郷した若き日の稲森氏と出会い、静岡の山裾の自然と近隣の素朴な人情に触れて、中勘助の服織での生活は、「国家的にも個人的にも最悪の事情の下にあって（中略）いわば熱砂の中のオアシス」であった。

稲森氏と中夫妻の心の触れ合い

を静岡にて年1回行っていて楽しき限りです。世話役は何かとたいへんですが、ほんとうに良く働いてくれ皆に便利のように細かく配慮してくれます。人生もこれからだと思い、健康でありたい。

58　猪瀬　忠賀

狭心症に倒れてから三年余り、鳴かず飛ばずの毎日です。病めばなお季節の移り変わりがいとおしく思われてなりません。静中卒業後五十二年余の歳月をしみじみと心にかみしめております。皆さんくれぐれもお体お大切に。

58　加藤　久

原田和彦君が八月四日膵臓癌で死去、七日に駒場聖祥徳寺で葬儀あり、望月恵一、伊藤健三君などと出席しました。同君は長らく日比谷高校（英語）教諭を勤め、代々木ゼミにも出講されておりました。御遺族・原田芳子夫人。住所世田谷区代沢一―十三―二

58　世古　真臣

2年前から相談役となり、のんびりしております。静中の同窓には殆どお目にかかれないがさびしい気がします。数年前に静高の会で静岡に戦後始めて参りました。静岡も大変変ったのに驚きました。東京在住のものの会でもあれば出席したいと思っています。

58　田熊博邦氏夫人より

九月十六日夫博邦、呼吸不全のため急死いたしました。生前は大変お世話になりました。皆様によろしくお伝え下さいませ。

60　新間　昌輝

第39号の柏木教授の坦々たる記事、感銘深く読ませて頂きました。先生の名講義は何時も講堂に満員の学生を集め、二時間を超える講義にも一人の退席者も見ませんでした。学問に対する深い探究心と情熱は今も往年の学生の心に脈々と生き続け、青春の爽やかな思い出となっています。

60　野沢　栄司

一昨年精神科クリニックを開業毎日忙しく働いております。

60　小林　金次

幹事の皆さんいつも御苦労様です。同窓会には関心はあるのですが、第二の人生の勤めが忙がしく思う様に参加出来ず御無沙汰致して居りますが、仕事もやめましたのでこれからはお手伝いも出来ようかと思って居ります。

60　逸見　昭三

戦後五十年、一字不説になられた友をおもう時、なんの為に生きるのかを頻りに自問する此頃。「老兵は消え去るのみ」と言ったマッカーサーのようにできないの

は、草花を見るにつけ、自然の光景を愛でるにつけ、文楽・歌舞伎を論ずるにつけ、そして稲森氏が算段して手に入れたたまの酒を味わうにつけ、うらやましく、いや妬ましくさえ思えるほどだった。その心交わしの様子は、中勘助が「一座建立」だと評し、また稲森氏がその言葉を聞いて、中断していた勉学への復帰を断念して、師匠一人弟子一人の〝中サン大学〟を選ぶことを決心したことに、ありありと見てとれるのである。

本題に戻ろう。「中勘助文学記念館」は、中勘助が静岡で最初に住んだ民家の離れ「杓子庵（しゃくしあん）」を三時の茅葺きのまま改築して建てられたもので、中には、『銀の匙』の初版本をはじめ作品二十七点が展示され、机二脚、インク壺、湯飲み茶碗など中勘助の身近にあった遺品も収められている。外には、命名のもととなった杓子菜畑をも復元して、当時の面影を残している。

場所は、安西橋を渡って、国道362号を藁科川沿いに遡り一というよりも、梅の花やおかんじゃけで有名な服織の洞慶院（おとうけんさん）を行き過ぎ、しばらくして右に折れた見性寺のすぐ手前である。

すぐにでも訪問していただきたい気持ちと、来年の花の時期にでも、中勘助の作品を手に携えて、お洞慶さんや木枯らしの森を訪ねつつゆっくりと来ていただきたい気持ちとが半々である。お洞慶さんは、梅の季節はもちろん、少し時期をずらせば桜の花も見事である。その頃になれば、中勘助が寓居の窓から眺めた杓子菜も時分だろう。

なお、中勘助の作品に触れるには、全集を別とすれば、先年岩波文庫として何冊か出版されたものが馴染みやすいと考える。さらに言えば、静岡出身の方々には、中勘助の素顔を知るよすがとなる、前述の『一座建立』（六興出版）をお薦めしたい。中公文庫も良いが、稲森氏の心込もるあとがきが変わってしまっていること、表紙を飾った夫人（稲森晴代さん）の美しい薄雪鳩の装丁が削られてしまったことから、残念に思っているからである。（85期　吉水　廣）

も事実。それにしてもモウロクしたものと思う。

61　君島　敏男

勤労動員のまま四年で卒業、敗戦の玉音を聞いて五十年。ゲートルを外して歩き出して五十年になります。

61　小久江浅二

年に一回は、テントを担いで、三千米の山に登っています。昨年は塩見岳、今年は聖岳でした。

64　松下　一男

決定された通り会費は払いますが、未納者のためにキチンと納めている者の会費を値上げするのは納得しかねます。何回か督促しても未納の方には会報の送付等とり止めたらいかがでしょうか。

64　近藤　博之

＜同期の幹事野沢正憲兄への手紙を要約転載……「ブラジルへ移住していた近藤君、同期生一同喜んでくれると思うので」と。＞

校旗を囲んだ同期会の写真を、今、刈谷の会社の寮で夏の高校野球の放送を聞きながら拝見――私も二十数年前、妻子を連れ十五年振りに訪日した折新宿で皆様にお会いした記憶があります。その後色々のことがありましたが、三人の子供達も現地で結婚し独立、孫も計七人に増え、私も再婚（前妻は小生四十七歳の時病歿）し、第二の人生を歩みつつあります。時代は急速に変り、私達も年をとりましたが若き日の心を失わずに！

来年は帰伯の予定ですが、日本も近くなってきておりますので、訪日の機会も多くなるでしょう。その折はよろしく。お元気で。

64　新井　彰

この春静岡に帰った折に、蓮永寺に行ってみました。家康の側室のお万の方の縁の寺とは知っていましたが、門前の由来書を読み直してみて、お万の方がNHKテレビの八代将軍吉宗の祖母にあたること（水戸光圀の祖母でもある）をはじめて知りました。

64　増田　政雄

那須塩原にひっこんでいます。長女が動物病院を開業し、目下、助手兼掃除係兼会計係で、娘にコキ使われております。妻も四人の孫の面倒を見させられて、毎日忙しくやっております。大自然の森の中の暮しです。東京に次男が一人燃されて、大学に通っています。

66　関本　和男

8月21日の誕生日で満64才。仕事も第一線を漸く退き、顧問として比較的気楽になりました。同窓会との付合いに時間不足もなくなりましたので御引廻し下さい。

66　安池　智策

白金の庭園美術館におります。旧朝香宮邸で戦後迎賓館として使用されていました。館長は、静中四十四期の先輩の鈴木進氏です。野球部におられたとの事で、甲子園優勝の時は三年生だったそうです。六十五才以上は無料となっております。お出かけ下さい。

68　立花　雍一

仙台の単身生活も三年になりました。東北の酒、肴も仲々いけます。みちのくの四季の変化は静岡にないものです。来年は集りに参加したいものです。市外電話は0070をよろしく。

68　稲葉　清

戦後50年、今年は各種の催しがあった。我々同期が静岡中学に入学したのは終戦の翌年、あれから早や半世紀を経ようとしている。思えば小学生時代は軍国教育の直中に育ち、一転して静中・静高では民主主義をイロハから学びながら青春時代を送ったのだった。

70　久沢　正雄

小学校から大学に至るまでのすべての同窓会というものに一度も出席したことがありませんでしたが、還暦を迎えて考えが少し変ってきたようです。急に参加しても常連仲間で大いに盛り上っている中、自分一人が取り残されてしまうのではないかという危惧もあって参加しなかったのですが、これからは思い切って出てみようと思っていますのでどうぞよろしく。

（〒255　大磯町東町3－8－23）

70　井田　勝久

第二の人世と言うことになりました。自由にやりたい事だけしたいと思います。

70　北村　孝

最近、若い人達にカラオケに連れて行ってもらっては演歌でない歌を教わったりして楽しんでいます。これから如何に老いてゆくべきかという締切り間近の宿題には未だ手を付けておりません。

『恐がらなくてもマイッカ！』

71　佐藤　利治

八月十七日より数日間商用でスエーデンを訪れました。折りから第三回ストックホルム　ウオーター　フェスティバルの期間中で北欧の夏祭りを楽しみました。

71　林　洋右

前回もそうだが総会の開催日が仕事日と重なってしまう。週末の仕事が主なので止むを得ないが、「ソウカイ」といってダジャレをとばし泣きを入れているのもシャレにならない、と思っています。

74　木村　敦

昨年、ドイツのミュンヘン大学で、「日本文化と企業行動」という演題で講義しました。

民間のビジネスマンとして、熱心なドイツ大学生・大学院生・教授を前に、スライドとプリントを使って緊張しながら二時間。良い体験でした。

78　奥山　和子

『大方様覚書』を日通文学に連載終って、今は短いものにかかっています。暇があるとご印帳を朱持って神社仏閣オリエンテーリングをしております。

80　小木　哲朗

戦後50年、昭和20年8月6日の原爆記念日に誕生した私もついに50才。ありふれた決意だがそれなりに手強い「禁煙」を決意。

87　山本　信也

企業に勤めて二十年弱、実務の牽引車としての重圧を感じるような年令になってしまいました。

89　赤井　高行

人生40年を振り返ってみても、自身の内は知識・経験が増えたのみというのは、さびしいので、内面を磨くというのをやっているつもりなのですが、静高時代の自分と、どこが磨かれたのかというと、仲々、自覚できないし、自信も持てないようです。

平成七年度会費拠出者

（順不同・敬称略）

平成7年4月1日～7年10月31日

42　井出多米夫、岩波信平（5）

43　中嶋敏、宮澤次郎、吉田幸一、北里良夫、倉沢栄吉、長戸寛美、松下篤三、望月孟夫、西沢純三、三好由三郎

44　臼井茂、高橋真一、増井三郎（5）、松下清夫

45　蝦原一郎、田附敏三、鈴木弥門、松林晋一

46　鼠入秀夫、内山規、篠原清、西静男

47　関口不二夫、星野三郎、土井知恵雄

48　青木香、伊藤重久、岩崎鑑一、大橋広世、黒水高典、近藤希賢、伏見賢治郎、原崎進一

49　篠原泰、嶋三四郎、菅沼栄、杉本久敬、直原敏衛、長井広山村忠平、植木定美

50　大庭左文、大庭富士夫、住太郎、松崎元彦、峰田静夫、山田喜志夫、梶原忠治、丸尾文治

51　伊藤濵吉、林盛次、原崎郁平、森弘、渡辺功、佐伯正剛、渡辺寛孝

52　綾部立一、市川雄八郎、大草知久、小川善次郎、川島吾八郎、新美弘、西田豊馬、服部雅雄、広川聡、茂呂茂樹

53　大石巌（13）、片桐鎮夫、志田寿一、三枝正裕、宗像醇、望月昂、奥野孝、小野一夫、木宮高彦、月見里得知郎、徳永悠久、橋本久仁寿、松前新太郎、山菅章雄、桜井昌也

54　居初良雄、大畑忠夫、佐野資郎、柴崎芳三、鈴木猛、高井昂、山田幸作、渡辺治郎、安東哲夫、庵原悌次

55　相川富士雄、小沢忠樹、中田吉信、中野治良、長沢栄一、野中篤、堀江重遠、松井保治、峰田陟、矢沢六雄、山下武男

56　山本孫一、日比光明、法月重雄、石塚由雄、伊東卓爾、奥野進、鈴木源一、橋本保二、原田昇、左右、川崎博、青木良文、清水逸郎

57　岩柳順二、岡田淳己、加藤健三、菅稔、坂田秀雄、鈴木明、富田澄、福住俊郎、藤巻重男、岩井平一郎、影島利邦、月見里礼次郎、望月修、米沢正次、名取保明、島根光明

58　伊藤健三、猪瀬忠賀、海野進、奥野広、加藤久、島村悟、鈴木栄三、須山静夫、世古真臣、萩原義臣、原木睦雄、望月恵一

59　内田武二、奥沢徹（13）、狩野和男、近藤陽三、酒井哲夫、勝呂清、田沢義彦、長谷川邦

三、原　淳、福地彊、福原元一、増田真一、三輪潔、小花敏郎、清水汪

60 逸見昭三、河合睦郎、君島康弘、黒田武之助、小林金次（5）、斉木学、柴田正臣、満間猛、鈴木明、鈴木光男、辻村輝彦、野沢栄司、山路敬三、益田要一、新間昌輝、井田淳、石関忠雄、上杉重吉、大石隆一、笠間達男、堤　崇、山本雅之助、伊藤久、稲森慎二、大石次男、片桐篤、君島敏男、黒川泰三、小久江浅二、清水照彦、高村岳史、西田駿之介、花見久、八木貞二、山崎和夫

61 62・63 伊東守、海野昭平、川手生巳也（5）、小宮鳥夫、真田宗明、三枝弘之、鈴木新之輔

64・65 新井彰、永田進一、蛭川博之、増田政雄、松下一男、望月坦、山本和彦、渡辺宏一、猿谷秀雄、神谷武男、野沢正憲、石川剞二、川合勉、久保泰夫、小嶋清司、小林五郎、杉本幸貞、瀬尾章、関本和男、中村伸吾、永島秀次郎、馬淵逸明、大塚修弘、大坪信之、大村敏夫、河守輝雄、北村友孝、曽根錦吾、田中俊男、原野谷朋司、増井和夫、村越立彦、西田尚史、深沢正、藤原隆二、三原載、武藤勇、森山秀夫、安池智策、山梨裕司、山下裕一、安田正弥、藤原朝則

66 67 稲村不二雄、小沢皎二、塩沢満、黒田秀幸、小坂博、小杉弘、鈴木秀治、成岡英彦、丸山英久、溝口淑郎、朝倉勇、朝比奈正三、岩崎為明、大石修而、岡村英二郎、梶原由三、川上剛二

68 石川勝也、秋山和也、井口禎、石川堯昭、伊月喬、市原卓、稲葉清、江崎善三郎、大川庄治、河口浩、小林功典、佐怒賀洋平、白鳥健次、杉山忠男、高橋俊見、立花雍一、田中英夫、塚本浩司、藤波真五、吉崎英輔、渡辺郁馬、萩原多賀男、鈴木満郎、雨宮明生、荒谷じつ子、岩瀬順郊、植田勇夫、宇田貞子、大橋勝弘、栗田瑞夫、佐野川好母、杉山和子、星野敏郎、望月芳朗

69 加藤喬志、加藤哲也、堤　章、望月道生、吉田政幸

70 石川悟、石本明、井田勝久、大場良臣、賀知進、北村孝、斉藤晴彦、佐々木政之、杉本啓、西山信三、松永茂、味岡宏、岩崎修、大高源之丞、関哲男、谷川治弘、中村龍二、村松勝治、若林久二、渡辺勝美、柳沢伯夫、鈴木明次、田中宏志、宮代省一、山田隆嗣、吉田修、久沢正雄

71 青木庄二郎、安藤龍男、石川宏、今村清彦、岩崎謙一郎、梅原孝允、達藤幸男、片山嘉博、加藤祐史、川上貫三、小池啓治、児玉文男、佐藤利治、実石欣哉、鈴木功、曽根幸一（6）、谷口滋、富野寿（6）、林洋右、本間啓司、松隈道雄、三上裕一、宮崎次郎、村松綏啓、山崎恭弘、小池泰光、山田卓夫、山本弘美、橋爪尚也、長倉真一、大木烈、秋田和男、浦田彰、後藤弘枝、渡辺弘、矢部正和、海野幸雄

72 夏目雅之、松島正明、深田均、山口公子、前田栄一

73 深沢靖男

74 井出広嗣、稲葉一宇、井鍋正良、興津隆之、川村知己、木村敦、佐野捷造、田形嘉之、中西恭二、花本栄二、藤原経史、山口雅子、山脇伊久男、佐藤鐘司、松下晴一、望月徹弥、岩崎匡利、中西健

75 今田肇、川瀬光彦、小林銈一、篠原興、鈴木正孝、宮村健二、川瀬光彦

76 小長井伸子、山岸誠二

77 岡村稔、石山健一、磯谷計嘉、岩田和子、大岩蓮、岡本天晴、小池敦夫、神戸紘一、武田恒章、松井義之、三浦位通、岩崎敏宏、栗田収司、清水雅尚、仁科光司、野方重人、奥山知子、小田島鏡子、甲賀国男

78 上田尚亮、君島正夫、島田智江、中山英子、吉見弘

79 小木哲郎、柴田裕、鈴木勝、中村政彦、増田安久

80 稲本伸子、鈴木としえ、堀内淳司、吉田昌史

82 浅井隆善、川口常久、藤原慎二

83 塩谷立

84 磯谷修平、佐久田博司、仲田剛、永田悟、牧野英敏、池田幸司、石垣政博、深津俊郎、増井喜一郎

85 成岡和美、杉山達彦、井出慎吾、沢井良輔、篠田みつ江、平岩正史、山本信也、横山葉子、渡辺久記、藻科名雄、石川嘉

86 87 和、橋村芳一

89 赤井高行、栗山伸一、鳥巣修

90 荒井郁子、荒井千明、清嘉枝、長倉正昭、小川晃弘

93 岡村幸彦

94 小池一徳、小山田潔、斉藤深雪、矢部龍太郎

95 清水尚彦、永江総宜

98 岩本裕二、堀籠浩一、美斉津雅子、望月洋伸

99 杉井浩太郎

100 五十嵐寧、吉川正則

104 岩本牧子

016 鈴木大喜、久保大作

108 相坂摂治、鷲巣祐介

109 大竹健一、藤島雄一郎

110 小林賢太郎、斉蔵昌也、後藤久美子、酒井裕美子、武田一仁

111 小川正芳、栗田倫宏、杉山裕亮、西村尚記、柳沢芳太郎、山口展弘、湯口崇之、野村陽子、宮城島綾子、湯沢美幸、鷲巣ひとみ、室星太郎

◎年会費の納入について切なるお願い！

平成七年五月十日の役員会において、規約第2条・第15条に基づき、止むを得ず本年度より年会費を三千円とすることにいたし、六月の総会に提案、承認可決されました。

同封の振込用紙で平成七年度の年会費三千円を早めに納入くださいますようお願いいたします。

◉振込用紙は毎回「会報」に、年会費の納入済・未納にかかわらず同封しておりますことご諒承ください。

鈴与株式会社

取締役社長　鈴　木　通　弘（76期）

清水市入船町11－1
TEL 0543(54)3015(秘書課)
東京支店　〒105 東京都港区芝公園1-2-12
TEL 03（3432）7192

新日本証券

相談役 大石　巖（53期）
専務取締役 海野　幸雄（71期）

本店/〒101 東京都千代田区神田駿河台3-11
☎03(3219)1111

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長　奥野　孝（53期）

本社　東京都台東区東上野2-18-7　共同ビル10階
TEL 03-3834-5331(代表)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長　奥野　孝（53期）
取締役社長　奥野　進（56期）
取締役副社長　奥野　広（58期）

本　社　東京都台東区寿2-5-12　加瀬ビル
Tel 03-3842-6831(代表)
静岡事務所　静岡市安東2-8-14
Tel 054—246—9378

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役　岩井平一郎（57期）

本　社　静岡市国吉田3丁目1番1号
TEL 054(262)1111(代)
東　京　中央区京橋1-1-6越前屋ビル8F
TEL 03(3272)4651(代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役　奥澤　徹（59期）

本　社　横浜市瀬谷区橋戸3－25－6　〒246
Tel 045-301-5545
大和工場　大和市深見3706－1　〒242
Tel 0462-62-0340　FAX 0462-62-0343
東松山工場　東松山市大字新郷88－47　〒355
Tel 0493-24-2511　FAX 0493-24-2513

株式会社 冨士越
株式会社 冨士越化成

代表取締役　野澤正憲（64期）

東京都渋谷区東2－14－9
TEL（3409）3342(代)
TEL（3400）9541(代)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱函病院（ねつかん）

院長　小坂　博（67期）

住所　熱海市春日町12－2
TEL 0557-83－3131

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役　朝比奈正三（67期）

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階
TEL 03-3254-2171(代表)

昼2時より夜11時まで診療

タカラ歯科診療所

代表　藁科名雄（ワラシナ）（87期）

東横線 中目黒下車徒歩5分
TEL 0120-376480